

道博協ニュース

第59号

発行所 平成9年(1997)6月25日
北海道博物館協会
事務局 北海道厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第三十六回北海道博物館大会 盛会のうちに終了

平成九年度の第三十六回北海道博物館大会は、去る六月二、三日の両日一五〇名からの参加者のもとに、名寄市で開催されました。

大会第一日は、グランド

ホテル・メーブルを会場に開会式、ついで午前一〇時過ぎからの総会では、平成八年度事業報告、同会計収支決算報告および会計監査報告がなされ、いずれも満場一致の承認を受けました。次いで平成九年度事業計画、会計収支予算案が、いずれも原案どおり可決されました。さらに平成一〇年度の第三七回大会は、日高管内の浦河町での開催に決まりました。

また、本年度は役員改選時期に当たり、地域、種別等を勘案して選出された七名からなる選考委員により、慎重に審議されたところ、後掲のよう

の役員として小樽市博物館長の本間 馨氏を加えた二四名の役員体制の原案となり、その結果は総会に報告され、満場一致で承認されました。このような経過に至ったのは、現在の協会の在り方について昨年、三月に答申されている「基本問題検討委員会報告書」の課題を、一つでも解決するために、再度、役員の方々にご尽力をいただくことになったからでした。

午後一時三〇分より文部省生涯学習局学習情報課教育メディア調査官 坂井知志氏による「博物館とボランティア」-博物館の情報化を受けて」と題する講演でした。この演題は本年の大会テーマであり、さらにボランティア活動については、国立科学博物館での自身の体験を通しての講話でしたので、きわめて示唆にとみ、且つ啓発されることの多い講演内容でした。

の謝辞、ついで次年度の大会開催地となった浦河町の教育委員会社会教育課長 内山 浩氏による地元紹介と力強い決意の一端が述べられました。午後六時からの懇親会は、名寄市教育委員会 教育長 赤部仁利氏の祝杯によって開宴され、さらに宴半ばにしての地元若者によるアトラクションも本大会の印象を一層、鮮明にさせる熱演でした。

ついで北海道博物館表彰規定にもとづく表彰式に移り、社団法人北海道美術館協力会(札幌)、長谷川重春氏(小樽市)、滝川市郷土研究会(滝川市)、山崎博信(名寄市)、太田善繁(広尾町)の三氏、二団体が受賞されました。午前の部の最後は、「日本における博物館の現状と課題」と題して日本博物館協会専務理事五十嵐耕一氏の報告をいただきました。

この後のシンポジウムは、「博物館とボランティア」のテーマで、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館長 斎藤 傑氏の司会のもとに、風連町教育委員会 水上憲司氏、旭川市博物館 上田良博氏、美幌博物館 鬼丸和幸氏、北海道立近代美術館 浅川 泰氏による実践活動を通しての報告がなされ、これを中心に質疑、応答、意見交換等々、午後五時過ぎまでの熱心な討議が続きました。

大会二日目の博物館等施設・史跡見学は九時半に二台のバスに分乗してホテル・メーブルを出発、名寄市北国博物館では鈴木邦輝、吉田清人両学芸員、下川町ふるさと交流館では発掘現場から駆けつけていただいた今井真司学芸員、さらに風連町歴史民俗資料館では前日にも報告をされた同教育委員会の上水憲司係長の諸氏に解説していただきました。さらに各館への移動の間、車窓からの風景とそこに繰り広げられた歴史についての要を得たガイドも、博物館大会ならではの視察研修でした。

大会一日目の最後は、翌日の施設見学に先立ち、閉会式が繰り上げられ、城戸崎会長

このようにして全道各地か

平成八年度 北海道美術館 学芸員研究協議会報告

北海道美術館学芸員研究協議会（道美学芸研）の平成八年度総会・研究協議会は、昨年一月二一―二三日の二日間の日程で、道立近代美術館を会場に開催された。その概要を紹介してみたい。

理由がここにある。また我々としても美術を中心に同時代の音楽や文学などを視野に入れた事業展開が、今後ますます必要とされることである。門戸をあえて狭くすることはないのである。

今回より道立芸術館（仮称）と道立文学館の学芸員がメンバーに加わり、一八館四四名の構成となった。来年十月、釧路にオープンを予定している道立芸術館は、美術を中心に音楽や舞台芸術に関する事業を展開する。また平成七年に開館した道立文学館は、常設展示室の他に特別展示室も併設され、ここでは美術作品をとり入れた企画展も開催される。例えば昨年の一「手島圭三郎の絵本の世界」では、原画である版画作品も出品され、ヴィジュアルな内容の展覧会となった。文学館の学芸員が道美学芸研に加入を希望した

一日目、研修のテーマは「印刷のプロセスおよび新技術への対応」である。広報印刷物や展覧会図録など、私たちの仕事はいかに深く印刷技術と関係していることであるか。しかし印刷現場でのプロセスの概要も知らないのが現状であろう。市内の印刷会社に依頼し、研修の場をそこに移して実施された。

企画、デザイン、文字やカラー画像処理、製版などのプロセス部門では、文字組版システム、さらにデザイン、レイアウト処理をコンピュータで行うDTPシステムを、そしてプレス部門ではコンピュー

ター制御で稼働する四色印刷機を、説明を聞き、質疑応答をくりかえしながら見学した。ここで私たちは、印刷のプロセスの実際を知るとともに、技術革新の現状も知った。印刷業界もデジタル化が急速に進み、特にプリプレス部門でのデジタル化投資が不況下でありながら増加している。専門職人によってしかできないかった作業を、デジタル化によって効率化すること、つまり多くの手間と人手、そしてコストを軽減することに目的があ

る。これはまた業界にとって競争力を上げるための必須の手段であろう。それでは我々にとってはどうか。メリットは容易に想像がつく。しかしその裏返しとしてあるデメリットについてはどうか。それについて印刷現場とデスクトップシフトする時間的余裕がなかった。ぜひ次回には、これを協議課題のひとつにあげてみたいと思っている。

二日目は「博物館実習の受入れについて」がテーマであった。これはおそらく全国の美術館が抱えている問題であろう。道内でも短期大学の四年制大学への改組転換が続き、それにともない学芸員の資格取得の課程が新設されるようになってきている。当然、実習の要望も増える。

そうした状況の認識はともかく、その対応ということになると協議はどうしても湿ったものとなる。実習を行っている館は、毎年その時期になると受入れの人数の調整やカリキュラムの設定、実施に頭を悩ませている。まして学芸

員が一、二名の館が半分以上である。実習の意義は認めても、受入れとなると良い策が浮かばないのも当然であろう。まずは、館の実情に合わせたカリキュラムの工夫、というところで、一応の意見集約となった。

著作権法の一部改正、学芸員の養成内容の改善・充実など美術館運営に係わる新たな動きが相次いでいる。実習は現行どおりの三単位だが、「大学における事前・事後の指導の一単位を含むものとす」とある。とすれば実習期間の縮小の可能性もあるわけで、今後関係大学との協議が必要となろう。

（道美学芸研幹事長 鈴木正實）
■お知らせ

北海道開拓記念館内の人事異動により平成六年六月より事務局体制が変わりました。

事務局長 山田 健、事務局次長 平川善祥（庶務総括）、同 山田悟郎（事業総括）、事務局員 笹木義友（庶務）、金森清治（庶務）、林昇太郎（事業）。



平成8年度道北地区博物館等 連絡協議会事業報告



道北地区博物館等連絡協議会は、昭和六〇年の発足以来、平成八年で二二年目を迎えた。この一〇年間は、展示を通して、道北三管内の博物館・資料館を地域に根付かせ、博物館・資料館の利用促進とその活動の活性化をはかることを目的に、巡回展を中心とした活動を行ってきた。一〇回目の巡

回は、計画段階から巡回までの間、いつも順調に事が運んだわけではなかったが、各博物館・資料館の協力を得て、何とか開催に漕着けたことが何度かあった。また、一〇回の巡回展を開催することによって、資料、展示構成等について、資料、展示構成等についていくつかの問題点が見えてきた。昨年度から開始した研修会も、可能なかぎり道北三管内に密着した話題を取上げ、三管内の博物館・資料館関係職員の研究をはかれるものにしたことと知恵を絞ってきた。

■巡回展

一〇回目当たる本年度の巡回展は、展示テーマを北海道の自然史（古生物）とし、留萌、空知、日高管内から出土したアンモナイト三〇点を

巡回する「アンモナイト展」である。展示は増毛町総合交流促進施設「元陣屋」を皮切りに一館を巡回する予定であり、開催が遅れたことによつて現在も巡回中である。一〇回目の巡回展を開催するにあたり、開催当初の展示構成方法に立ち戻るべく展示計画を進めてきたが、資料等に隘路があり、展示計画を一八〇度転換せざるを得なかった。これは今後も巡回展を継続するために、展示計画から巡回に至るまでの間の再検討を迫るものであり、理事会、総会等で話し合い、解決してゆかなければならない問題である。

「アンモナイト展」を開催するにあたっては、北海道化石会の全面的な協力を得たことを特記しなければならない。また、解説・図等のパネル類の作成は、類似の特別展を開催し、この種の展示に明るい留萌市海ふるさと館に担当してもらった。

■研修会

斯界の研究者を招聘した研修会は、平成九年三月一日

二日、留萌市中央公民館で開催した。当協議会の研修会は、道北地区の博物館・資料館関係職員のみを対象とするのではなく、開催地の住民の方々にも参加していただいている。第二回研修会にも、多くの留萌市民が参加した。

北海道と他地域との交易については、南方（本州）との関係が語られることが多かった。しかし、北海道の位置を考えると、当然のごとく、その北方との交易も見てゆかなければならない。そこで、本年度は「近世における北方交易」をテーマに、お二人の研究者に講演をしていただいた。

三月一日、研修会後には、懇親の場を設けて、お二人と懇談し、講演と共に有意義な時を持つことができた。演題及び講演者は次の通りである。

「北方交易と諸民族」 国立民族学博物館 助教授 佐々木史郎氏

「一三―一六世紀の環日本海域とアイヌ」 札幌稲西高等学校 教諭 中村和之氏

本年度の研修会は、北海道

立アイヌ民族文化研究センター、留萌市海ふるさと館との共催で開催した。他から研究者を招聘するにあたっては、謝礼、旅費等の経費を要する。しかし、他機関との共催によつて、本年度の研修会はより充実したものとなり、更に経費の軽減をはかることができた。僅かな予算で運営されている当協議会にとつては、今後の研修会等の企画には常にこれを念頭に置かねばならないことである。

（旭川市博物館 青柳信克）
※「1頁下段より続き」

らの参加者は、今回の研修の成果や思い出を抱いて再び各職場に戻りましたが、これらを糧にして今後の館・園の運営に少しでも参考になればと念じた次第です。

最後に、今回の名寄大会は協会事務局長の交代直後の大会にもかかわらず、地元名寄市をはじめ関係者各位のご協力により、盛会裡のうちに終了出来ましたことに、改めて感謝申し上げます。

（事務局長 山田 健）

第36回北海道博物館大会に参加して

私が初めて参加した北海道博物館大会は、六月一二・一三日の二日間にわたって名寄市で開催された。一日目は総会のほか、「博物館におけるボランティア活動」をテーマとした特別講演やシンポジウムが行なわれた。二日目の施設見学では名寄市北国博物館、下川町ふるさと交流館、風連町歴史民俗資料館を見学した。

■博物館の情報化の現状

特別講演では博物館の情報化とボランティアについて話された。特に博物館の情報化の可能性について、将来像や問題点、また、最新の技術を応用した映像システムの実演などが印象的であった。

その一方で今日の博物館の現状を振り返ってみると、果たしてどれくらい「情報化」が進んでいるのだろうか。これらの話はすべて他の博物館や教育施設、あるいは一般家庭とネットワークで繋がって

いることが前提であるにも関わらず、そのような環境にある施設は非常に少ないのではないだろうか。実際、今大会の参加者の中では、インターネットのホームページさえ持っていない施設がほとんどであった。

これから情報化を進めていくという施設はかりだが、講演でも指摘されたようにコンピュータや通信の世界は文字通り日進月歩である。本格的な情報システムの導入は、遅いと世の中の動きから取り残され、かといって早すぎると、周囲が追いついてきたころには自分のところは旧式となってしまうという別のシステムが標準として確立していたりする、ということもありうる。

そのタイミングが非常に難しい情報化だが、現在ではパソコンと電話回線さえあれば個人でもインターネット経由で世界中に情報発信できる。

いきなりテレビ会議やバーチャル・ミュージアムとは言わなくても、他にもすぐにできることはたくさんあるのだから、簡単などころからもって活用していくべきではないだろうか。

■博物館におけるボランティア活動

中学生の時、遠足で国立科学博物館に行った。実物展示のゼロ戦を見ていると、そばにいたおじいさんが近寄ってきて「私は戦争中はパイロットだったんだよ」と、いろいろな話をしてくれた。それまではただカッコイイ飛行機、と見ていたのにすぎなかったが、話を聞くことによって、

これに乗って戦争をした人間の存在、というものを実感させられたのを覚えている。職員にもただの話好きな入館者にも見えないその方が、今思えば返してみるとボランティアの方だったのだろう。これが私のボランティア（に出会った）初体験である。

それから十数年、正直な話、私は学芸員の職についてから「博物館のボランティア」展示の解説員「くらのイメー」ジしか持っていなかった。一般人の目に触れるのも確かに解説ボランティアが圧倒的に多い。しかし今回のシンポジウムでは四つの施設における活動の一端が報告され、展示の解説ももちろん重要だが、それ以外にも非常に多彩な活動が行なわれていることに気づかされた。

特に印象的だったのが美幌博物館の事例で、ここではボランティアと専門家を交えたコウモリの生態調査の様子が報告された。学芸員がわずかしいかなくても大規模な調査ができ、また参加者も興味を

広げ、専門知識に触れることができる。私の専門も自然科学系であるため、大変興味深い話であった。

このようにいいことづくめのボランティア活動のようだが問題もある。施設によって謝礼があったりなかったり、また研修の有無もバラバラである。ある程度の技能を持ったボランティアになると、中にはやはり謝礼を要求する声もあるらしい。私の考えとしては、各施設の間で統一した基準のようなものを設けたほうがいいのではないかと思う。

■おわりに

このほか、他の施設の方々の交流や学芸員自らの案内による施設見学など、有意義な二日間であった。私は就職してまだ二ヶ月余、しかも準備室なので博物館業務についてはまったく言っていないほど知らないが、石狩市の博物館開設の参考として、この体験を活用させていただくつもりである。

（石狩市文化財・博物館開設準備室 学芸員 志賀健司）



—新館・園紹介— 風のテーマ館 襟裳岬風の館

北海道を東西に分ける日高山脈が南下して太平洋に沈み込むように突き出た壮大な襟裳岬。ここは、風極の地と呼ばれるほどの強風遅滞です。

日平均風速十二メートル。風速十メートルを超える日が年間二九〇日以上もあり、住民にとっては嫌な存在でしかなかった「風」を逆手にとり、まちおこしをしようと風のテーマ館「襟裳岬風の館」が六月一日にオープンしました。



展望襟裳岬

風の館建設の主目的は、地域が永続的に発展することを念願し、えりもの地を訪れる全ての方々をあたたく迎え、えりもの自然と信条を誇りをもつて人々に伝える場を構築するものとしています。テーマメッセージの「風」を紹介し、人と風のコミュニケーション、自然との共生を謳いあげながらストーリー展開し、気象を支配する風のみにとこだわらず、生活、文化、産業、教育全般に渡って風との関わりを幅広く取り上げております。

施設の建築デザインは風の流体現象である「カルマン渦列」の形状を採用し、国定公園内の自然景観に配置しつつ、襟裳岬の過酷な気象条件を考慮した結果、建物は全て地に潜む形態で施工し、地上面からはその存在は窺い知ることができないほど周辺環境に溶け込んでいます。

廊」から入館します。ここでは外に今吹く風の強さと同じ速さで光が流れ、風の音が聞こえ、風の色を見て、風のかたちを感じる事ができます。本館では最初に風速二五メートルの「えりも風体験」で様々な風を体験できます。つづいて、「展望襟裳岬」から心ゆくまであるがままの襟裳岬の景観を見学。霧などで気象条件の悪いときは、二五メートル×五メートルの巨大なガラス窓はすべてスクリーンに変わり、襟裳岬を見逃すことのないよう工夫されています。この背後は「風の生命惑星地球」を中心とした展示Aゾーンで、世界の風系からえりもまでの風の流れが分かります。

地下二階の展示B、Cゾーンでは、カメラを自分で操作しながら襟裳岬沖のゼニガタアザラシの愛らしい姿を楽しんだり、三〇面のモニターで見る世界の天気からえりもの局地予報が展開されています。そのほか、「入館記念として「風のパスポート」が用意され、疑似体験コースではえりもの風になって岬周辺を巡ったりと、風と仲良くなれる可動式展示もあり、風を身近に感じる事ができます。風のシアターでは、風とともに生きる人々を生き生きと描いた「えりも風土記」と、風が織りなす自然の美しさを表現した「はじめての風ありき」が臨場感溢れる音響とともに四〇〇インチの大画面に上映されています。

風の館は、風の存在があつて、地球そのものが一つの生命体となり、そこに人々もあらゆる動植物も生かされていることを知っていただくテーマメッセージを発信し続けています。

(館長補佐 熊谷英二)
 <利用案内>
 ■入館料 大人五〇〇円、高校生以下は三〇〇円(幼児無料)
 ■開館時間 五月から九月までは午前八時から午後七時まで。一〇月から四月まで午前八時三〇分から午後五時までです。

■休館日 年末年始(十二月三十一日から翌年一月五日)
 ■交通 JR様似駅からJRバスにて襟裳岬まで約一時間。千歳空港から車で約三時間。帯広空港から車で約一時間四十分。

■問い合わせ先 襟裳岬風の館 〒058-02 幌泉郡えりも町字東洋三六六番地の三
 TEL 〇一四六六三二二二三
 FAX 〇一四六六三一三三五



— 新館・園紹介 — ペテルブルグ美術館

ペテルブルグ美術館は、観光の街小樽の顔である運河のほとりに平成七年七月に開館しました。ロシアの芸術の都サンクト・ペテルブルグの代表的美術館の全面的な協力のもとロシア芸術はもとより世界中の美術館からの美術品を紹介しています。

大正時代の銀行建築

地上四階地下一階の鉄筋コ



ンクリート造りのペテルブルグ美術館の建物は、国会議事堂の設計も手掛けた、矢橋賢吉によって旧北海道殖産銀行小樽支店として大正十二年にたてられたものです。現在、小樽市の歴史的建造物の指定を受け、北海道経済の中心地であった小樽を象徴する建物となっております。一階から四階を展示室に利用していますが、特に一階から二階にかけて吹きぬけとなっている大展示ホールでの作品の鑑賞は当美術館ならではのものです。

ロシアが誇る名画を紹介

ペテルブルグ美術館は、一八九八年にロシア初の国立美術館として設立され、以来ロシア美術を中心に収蔵を続けてきた国立ロシア美術館と密接な協力関係にあります。当美術館では、国立ロシア美術館の収蔵品を含めて世界各地の美術館の作品を展示してき

ましたが、特に国立ロシア美術館が誇るロシア芸術の至宝数々は、多くの日本の方々に新鮮な感動を与えています。

十一月まで三大企画展開催

ペテルブルグ美術館では四月十八日～十一月三日まで、「パブロ・ピカソとその影響を受けた画家たち」「ロートレック」「ロシアにおける劇場展」の三展覧会を開催しております。

ピカソ展では、ロシア及びヨーロッパ各地の美術館から日本初公開の作品五五点を展示しています。また同時代のロシア・アヴァンギャルドの画家たちの作品も合せて展示し、パブロ・ピカソとロシアの画家たちのお互いの影響を対比させています。ロシアにおける劇場展は、日本で初めてロシアの舞台芸術を紹介する展覧会であり、今世紀初頭に実際に使用されたコスチュームを含めて紹介しております。ロートレックの作品は、世界一のロートレックの個人コ



Z.E. セレブリャコフ バレリーナ M.S. ドブロリューボフの肖像
1923 国立ロシア美術館蔵

レクション「シンメル・コレクション」を日本で初めて公開しています。

(総務マネージャー 時田繁男)

五時

■休館日 夏期：無休 冬期：月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始

■交通 J.R小樽駅下車徒歩十五分、もしくは中央バス小樽マリン号・ロマン号乗車

〈利用案内〉

■入館料 夏期：大人一五〇円、中高生七五〇円、小学生五〇〇円 冬期：大人七〇〇円、中高生四五〇円、小学生三五〇円

■開館時間 夏期(四月中/十一月初)：午前九時～午後六時三十分 冬期(十一月/四月初)：午前十時～午後

■問い合わせ先 ペテルブルグ美術館 北海道小樽市色内一丁目三番一号

TEL 〇一三四二四二二四〇 FAX 〇一三四二四二二四〇

館・園のおもな事業 (6月～9月)

- 北海道立文学館
7・5 文芸セミナー、7・26 / 8・17 たんけん文学館「北の大地と動物たち」
●知内町郷土館
7月上旬 星空観察会、7・30 ふる里再発見の旅、8・6 子どもだけの料理教室、8・14 サマーカーニバル
●栗山町開拓記念館
6・28 / 7・12 縄文式土器作り、7・31 / 8・1 チビッコ歴史教室、8・5 竹馬作り他
●小樽市博物館
7・18 / 9・7 特別展茨木コレクション「郵便切手に見る明治・大正・昭和」、8・4 自然科学講座「昆虫観察会」
●北海道立近代美術館
7・5 / 8・15 特別展「わが心のアメリカ絵画」、8・23 / 9・21 「日本の美・雅の世界」、8・23 / 11・16 「北方の形象」
●北海道立旭川美術館
7・12 / 8・17 「17世紀オランダ絵画の黄金時代展」、8・23 / 9・21 「フランク・ロイドライトと日本展」
●札幌芸術の森
6・1 / 7・13 「アントニー・ゴームリー展」、7・19 / 9・7 「伏木田光夫展」、7・5 / 8・31 「ピアマガライカン」
●名寄市北国博物館
7・12 観察クラブ「見晴山に登ろう」、7・24 / 8・31 特別展「フクロウ」
●釧路市立博物館
7・27 / 8・10 特別展「環境マンガ展」、8・12 / 31 企画展「お魚セミナーパネル展」、8・31 / 9・6 「理科標本展」、8・3 観察会「夏休み植物研究」
●北海道開拓記念館
7・11 / 8・31 特別展示「クビナガリユウからステラ・カイギユウ」、7・13 講習会「親子でみる森の自然」、8・17 「石器をつくる」
●北海道開拓の村
7・6 朔原太鼓、7・20 児童生会、7・21 大道芸、7・27 鍛冶屋職人の実演、展」
9・23 田舎芝居
●有島記念館
7・31 / 9・15 「有島武郎青少年公募絵画展」
●北海道立オホーツク流水科学センター
7・1 / 8・31 「オホーツク夏情報」(展示)、「オホーツク流水科学教室」
●室蘭市青少年科学館
7・30 / 8・9 「夏休み科学クラブ」、8・30 / 9・28 「科学遊園」展示会
●室蘭市民俗資料館
7・25 / 8・30 特別展「ラジオとレコードで聞く音の昭和史」
●財団法人アイヌ民族博物館
7・12 アイヌ文化教室
●真狩村羊蹄ふるさと館
8・9 「羊蹄ふるさと館フォーラム」
●札幌博物館・農業館
8・10 / 11 「夏休み自然教室」、7・20 / 8・31 企画展「収蔵美術資料展」
●小樽ベエネツィア美術館
6・1 / 8・31 常設展示替「真夏の夜の夢」、8・7 / 10・26 特別展「ヴェローナ展」
●札幌市青少年科学館
7・24 / 8・17 「光のワンダaland」、7・25 / 26 移動科学館、7・30 / 31 氣象講座、7・9 / 13、30 / 8・3 天文台夜間公開
●滝川市美術自然史館
7・1 / 8・17 「北の現代具象展」、8・22 / 9・28 「木田金次郎とその周辺」
●市立函館博物館
6・1 / 8・31 特別企画展「縄文人の青函交流」、7・29 / 9・21 「函館の明治維新」
7・27、29 「夏休み自由研究」
●神田日勝記念館
8・9 / 24 「砂田友治展」、8・24 「馬耕忌」
●江別市セラミックアートセンター
6・7 / 7・27 企画展「セト・ノベルティ」、8・31 窯めぐり
●砂川市郷土資料室
7・26 / 8・17 「世界の昆虫展」、8・26 / 28 「映写機の今昔展」
●根室市博物館開設準備室
5・26 / 7・25 特別展「沖繩の貝」、7・20 土器づくり
●函館市北方民族資料館
7・19 / 9・28 特別展「樺
- 7・29 「北方民族の切り紙細工をつくろう」
●北海道立文書館
7・2 / 3 古文書解読講習会
●北海道立帯広美術館
8・9 「茶の湯の美術」
●札幌市円山動物園
7・1 / 8・31 幼児・児童動物画コンクール募集、8・15 / 16 親子夜の動物ウォッチング
●美唄市郷土史料館
6・21 / 7・10 「写真展」、7・17 / 8・23 特別展「宇宙からの使者」
●帯広百年記念館
7・12 / 21 「収蔵作品展」、13 自然観察会、8・10 / 9・15 企画展「リスがすむまち、どんなまち」
●厚岸町郷土館
7・20 体験学習セミナー、8・1 / 9・2 「郷土館・海事記念館合同特別展」
●旭川市青少年科学館
7・26 / 30 夏の科学教室、27 天文普及講座、8・6 / 7 科学クラブ員野外教室
●北海道立北方民族博物館
7・19 / 9・28 特別展「樺

● 2005「4」、8・2 講演会 「わたしのなかのサハリン」	● 登別市郷土資料館 7・12 草木染、26 わらじ作 り、8・23 笹舟作り	杉浦重信(富良野市郷土館 係長)、鈴木絃一(旭川市博 物館長)、地徳 力(穂別町 立博物館 学芸係長)、土屋 周三(小樽市教育委員会 主幹)、 中川 元(斜里町立知床博物 館長)、本間 馨(小樽市博 物館長)、三野紀雄(北海道 開拓記念館 学芸部長)、久 末進一(室蘭市民俗資料館長)、 村田 保(帯広百年記念館長、 保田信紀(大雪山国立公園層 雲峡博物館長)、矢野義和 (札幌市青少年科学館長)、 山丸和幸(アイヌ民族博物館 長)、(空席)(北海道開拓の 村専務理事)	あて館職員の事務局担当依頼 4・15 次期役員の選考等に ついて役員にアンケート送付 4・16 平成9年度道博協表 彰候補者の推薦関係書類送付 4・16 平成9年度道博協負 担金の請求書送付 5・1 第36回道博協大会開 催案内状送付 5・1 第36回道博協大会の 共催、後援、講師等について 依頼状送付 5・1 平成9年度第1回役 員会開催の通知 5・2 名寄市に第36回道博 協大会開催地負担金交付申請 5・9 浦河町教育委員会へ	5・21 平成9年度道博協表 彰に関わる審査書類役員へ送付 5・31 平成9年度道博協表 彰受賞者決定 6・3 平成8年度会計監査 のため北網圏北見文化センタ ーに由水事務局員出張 6・6 北海道開拓記念館長 あて第36回道博協大会へ事務 局員派遣依頼 6・9 第36回道博協大会資 料納入 6・11 平成9年度第1回役 員会兼第36回道博協大会実行 委員会(於名寄市北国博物館) 6・12/13 第36回道博協大 会	
● 札幌市豊平川さけ科学館 7・13/20 さかなウオッチ ング	● 星の降る里百年記念館 7・26 続縄文土器づくり、 8・2 遺跡見学会	監事 熊坂吉寛(北網圏北 見文化センター館長)、田中 良吉(滝川市美術自然史館長) なお、役員改選に先立ち、 五月に理事 及川杜一氏(北 海道開拓の村専務理事)が退 任、また、六月人事異動によ り副会長 安藤孝次郎氏(北 海道立近代美術館副館長)、 協大会補助金交付申請 5・24 第36回道博協大会資 料発注 5・30 第36回道博協大会補 助金交付決定	5・9 浦河町教育委員会へ 6・18 事務局会議 新事務 局体制決定 6・18 第36回道博協大会関 係の札状送付 6・21 新道博協役員へ就任 依頼書送付 会費納入のお願い 本協会の円滑な運営のため 会費納入を左記に願います。 (会費)		
● 榎法華村灯台ファミリー博物館 5・1/トドポックルフォト コンテスト(募集)	● 浦幌町郷土博物館 8・4 親子史跡見学会	● 江差追分分定時演奏 7/9 江差追分分定時演奏	● 別海町郷土資料館 8・30 土器をつくる	● 木田金次郎美術館 7・19/20 ふるさとこども 美術展	● 上富良野町郷土館 7・26/8・8 郷土館スタ ンプラリー」、8・10「かみ ふらの見学ツアー」